

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■地球の木 理事長挨拶	1
■ネパール現地調査報告 4年ぶりのネパール訪問	2~3
■JVCラオスプロジェクト報告	4
■ラオス図書プログラム	5
■カンボジア女性緊急救援センターの支援について	6~7
■地球の木と私/活動日誌	7
■トルコ・シリア地震緊急支援報告	8
■編集後記	8

一本ずつ木を植えるように 一歩ずつ丁寧に

地球の木につながる皆様、昨年度も地球の木を共に支えて下さり、ありがとうございました。

この一年をふりかえると、世界も日本国内もまさに激動の年でした。昨年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻は泥沼化し、核兵器をもちらせた非人道的な侵略行為を、どうして世界は止めることができないのかと無力感に襲われました。ロシアによる戦争は中国や米国を巻き込み、台湾有事をも引き起こしかねず、日本の安全保障は脅威にさらされています。

また、ウクライナでの紛争は歴史的なインフレを世界経済に引き起こし、食品やエネルギーが高騰して私たちの暮らしを直撃しました。さらに、安倍晋三元首相の銃撃事件や特殊詐欺グループによる相次ぐ強盗犯罪は、治安のよい日本という幻想を打ち砕き、国家権力による統制を強め、日本を戦争のしやすい国へと推し進めています。

本年2月に起きたトルコ・シリア地震は、その被害の甚大さに心が痛みました。死者は56,000人以上、被災者は2,000万人以上、今も数百万人が避難生活を強いられています。地球の木の緊急救援募金には多くの方のご寄付をいただきましたことを感謝申し上げます。ご寄付は、両国に日本人スタッフを派遣して被災地支援を行っている特定非営利活動法人バルシックを通して、緊急復興支援活動に用いられています。(現地の報告は8ページをご参照下さい)

感染症法上の位置づけが5類に移行したコロナウイルスについても、何ら明確な対策が講じられないまま「アフターコロナ」の日常が始まります。このような不安定で先の見え

ない世界において、私たちはどこに希望を見出せばよいのでしょうか。平和な社会を築くためには、一体何から始めたらよいのでしょうか。一つだけ言えることは、諦めないということです。絶望的だと思える世界も必ず変えられるのだと信じて、今日や明日を生きることです。

先日、『グレート・グリーン・ウォール』という映画を見ました。「グレート・グリーン・ウォール(緑の長城)」とは、アフリカを横断する形で、セネガルからジブチまでの乾燥した砂漠地帯を緑化するために、アフリカ各国が連帯して2007年に始めた壮大な環境プロジェクトです。映画では気候危機によって難民化を強いられ、紛争と貧困の中で絶望的な状態にある人々が、それでも未来を信じて木を植え、荒廃した土地を回復させつつある姿を描いていました。

私たちはアフリカに行って木を植えることはできないけれど、自分が今日、食べるものやエネルギーやその使い方が少しでもアフリカの砂漠化を防ぐことにつながるのであれば、それを行わない選択肢はありません。そして、国を越えた連帯が、長い年月をかけて行動を続けることで、世界は確実に変わるのだと信じることです。そんな国際協力の原点を思い出させてもらいました。

地球の木につながる私たちも、今日や明日の行動を、一本ずつ木を植えるように一歩ずつ丁寧に暮らしていきましょう。9月には「森との共生」をテーマに地球の木講座を開催いたします。2023年度も、地球の木を共に育てて下さいますよう、よろしく願いいたします。

理事長 磯野 昌子



磯野理事長

2月末、インドラサロワール農村自治体 (IRM) を訪れ、行政の人たちや学校関係者に会うことができた。コロナ禍のため、新しい支援地での活動が始まっているにも関わらず、IRMの人々と一度も会っていなかったが、4日間の滞在で多くの人たちに会い、話げできたことが大きな収穫だった。地方分権が進み、選挙で選ばれた若い代表たちが各地にいて、熱心に村の展望を語るのを聞き、大きな変化とエネルギーを感じた。

インドラサロワール

インドラサロワール農村自治体は、カトマンズの南西にあるマクワンプル郡の北。舗装された道路を車で50キロ走り、その後は曲がりくねった山道を通って行く。ファケル地区は標高1800メートル。村人の大部分が自給自足の農業を営む。若者の就職先がなく出稼ぎ



IRM首長デヴァ・クリシュナ氏が多い。村を出た人のうち海外在住は19.2%。人口の約72%がタマン族。インドラサロワールの名称は、ネパールで最大の人造湖から取っている。クレカニダムによってできた長さ7キロの巨大な湖だ。

IRMの首長であるデヴァ・クリシュナさんは、カトマンズとヘタウダを結ぶ道路工事が進んでいるため、今後大きな変化が起こることを予測する。この地域で栽培される野菜などをカトマンズに運ぶことができる。重病人をカトマンズに早く送ることができる。観光への期待も大きい。しかし、道路開通により、悪いことも入って来るだろうし、工事による地滑りも心配だ。これから力を入れるべきことは、第一に教育、次に健康と、30年の教職の経験がある首長は今後の展望を語った。

数字で見るインドラサロワール(2022年)

郡	マクワンプル郡
面積	97km ²
人口	17,085人(2011年調査)
区の数	5区
世帯数	3,391世帯
識字者	(6歳以上) 10,462人
学校数(小中高)	21
民族	タマン 72.4% ネワール 9.2% ブラーミン・チェトリ 9.2%

子どもにやさしい地域

インドラサロワールには5つの区がある。SAGUNIは、まずは4区と5区を中心に教育の質向上のためのプログラムを開始している。ネパールではチャイルドフレンドリー地区を全国に作ることを目指している。これは、子どもが育つのにやさしい地域づくりで、暴力や児童労働をなくす、子育てに良い環境づくりなど、41の指標を設けている。4区と5区は5年前に全指標をクリアし、チャイルドフレンドリー区の宣言を

した。将来はIRM全体がチャイルドフレンドリー農村自治体になることを目指す。

4区の区長のチャンドラさんは42歳。昨年の選挙で選ばれた新しい区長だ。小さな店を夫婦で経営し



ファケル カリカ高校から見る段々畑

ている。チャイルドフレンドリーな区を維持するための努力や、妊産婦に対するケアを手厚くする計画を話してくれた。村では対応できない出産にはカトマンズの病院に無料で車を手配したり、産前産後に食料を無料で提供するサービスなど。子どもを大切に作る施策とともに日本でも実施したいものだ。チャンドラ氏も教師の経験があり、首長同様に教育と健康を第一に考えていることがわかった。

教育について

5区にあるマハチュニ高校では10年生のクラスの生徒たちと交流した。学校のよいところを挙げてもらうと、規律正しい、清潔な教室、理科教室、コンピューター教室などたくさんあったが、改善点としては、校庭の狭さと先生が始終変わることが挙げられた。先生の種類は3つある。正教員、1年ごとに契約を結ぶ臨時教員、地域雇用教員(支援団体による雇用も含む)。このうち、正教員と臨時教員は政府から給料が出るが、地域で雇う場合は、額が少なくなることも、途中で打ち切りになることもある。統計では、IRMの小学校から高校までの教師149人のうち、正教員は36人のみ。臨時教員が36人、地域雇用が77人であった。校長のみが正教員の場合も多く、校長さえも臨時教員の学校もあった。より良い条件の所があればすぐに異動することが課題だ。

この地域の生徒は、理科と数学の点数が悪く、マハチュニ高校では、10年生で受ける国家統一試験SEE(中等教育終了試験)で合格点が取れた生徒が2人のみという惨憺たる結果だったそうだ。そのため、数学の教師派遣や、数学のワークブックの配布も行った。

「質の高い教育」を目指して

学校ができたことは最初のステップだが、ただ通うのではなく、教師・保護者・生徒が教育の意味を理解し、協力し合って学びの場を作り、卒業後の人生に役立ち、社会に役立つ知識や



記事作成トレーニング参加者とカマルさん(右)

行動力を身につけることが重要だ。ネパールの学校では暗記が中心となっていて、自分の意見を述べたり、書いたりする訓練はあまり行われていない。そこで行ったのが記事作成トレーニング。参加した高校生2人に話を聞いた。10年生のヨギタさんは読書好き。ナイチンゲールの伝記を読み、将来は看護師を目指すようになった。ナイチンゲールは裕福な家庭に生まれ、自分は貧しい家に生まれたという違いがあるが、人のためになる仕事をしたいと意欲的だ。11年生のビビサさんは、トレーニングで文章の書き方や勉強の仕方を学び、学校紹介の記事にした。緑が多く環境の良い地元を愛するビビサさんは、これからも書いていきたいと述べた。

心理社会カウンセリングトレーニングに参加した先生たち

と面談した。これまで知らなかったことを学んだと興奮気味に話してくれた。それぞれ異なる生徒たちの背景に気を配ることや、授業の始めに子ども達の気持ちをほぐす工夫など。今まで気づかなかったことを気づくようになったと、更なるトレーニングを望んでいた。

2つのトレーニングは教育の質を高めるための独特のトレーニングであり、新しい知識を得たことで、更にどんどんと吸収していく参加者たちの勢いを感じた。この活動はまだ始まったばかりではあるが、エネルギーあふれる行政の人たちや学校関係者と意見交換を重ねていき、地域の教育の質を高めることにこれからも貢献していきたい。

(ネパールチーム 丸谷 士都子)

「今度ネパールに来る時はうちに泊まってね」

久しぶりのネパール

深夜のトリブバン空港に迎えに来てくれたパートナー NGO・SAGUNのカマルさんの車でカトマンズ市内に向かう途中、闇の中から紫色のネオンが視界に飛び込んできた。5年前にはなかった風景だ。カトマンズを囲むリングロードは中国資本によって整備されて道幅が広くなり、渋滞は緩和された。ショッピングモールやマンションなどの高層ビル、外車やオートバイのショールーム、潇洒なレストラン、カフェ…。カトマンズにも消費文化が拡がりつつある。サリーを着る女性がすっかり少なくなり、街のあちこちにあったサリーの仕立屋が減った。固有の文化が失われていくのは寂しい。

カトマンズ近郊に足を伸ばすと、以前の、のどかな農村風景は姿を消し、雨後の筍のように4階、5階建ての家が増えている。都市への人口一極化で飽和状態になったカトマンズでは吸収しきれない人口が、近郊の村々にまで押し寄せているのだ。地域の住民たちは、畑を売って家を建て、地方から流入する人々に1階と2階を貸すという。

英語熱は盛んで、支援地の小学校でもネパール語と地域の文化や言語などを学ぶ教科以外は英語で教えていた。少数民族にとっては、ネパール語も英語も、母語でないという点では同じなので、どうせ勉強するならよい仕事に結びつく英語の方がいいと考える親が多いそうだ。朝礼で英語のスピーチをする小学生。堂々としていた。私立校でずっと英語で学んできた若者たちの英語は早口で流暢だ。外国に行くことを望んでいる若者が多い。空港は出国するネパール人で溢れていた。



英語で教えるチャンドラ小学校で朝のスピーチ

初めての インドラサロワール

カトマンズからでこぼこ道を土埃を上げながら車で2時間ほど走ったところに新しい支援地インドラサロワール農村自治体(IRM)がある。玄関口に位置するファケルはすり鉢状に広がった段々畑に360度囲まれている。前の支援地マンガルトールと

大きく異なるのは、家畜が少ないこと。農業を生業とする世帯が多く、私たちが訪れた2月末は乾季休耕中で、春植える野菜に向け土壌作りをしていた。出稼ぎが多く、家族が日本に行っているという人もいた。

初日の晩、宿の食堂に行くとき男性たちが三々五々集まってくる。話を聴いていると区長や教育委員会の委員長、校長先生など村のお偉方ようだ。興味深かったのは、ノンアルコールで話が盛り上がっていること。SAGUNのカマルさんは25年前から、マハントさんは15年前から、ボランティアとしてファケルで参加型地域づくりの取り組みに関わっている。家族のように打ち解けた人間模様は、長年の活動の中で紡がれたのだろうか。

印象的だったこと

私は、2017年のネパール訪問時に元パートナーSOARSのエルマラさんから聞いた「クオータ制」のことがずっと気になっていた。地球の木が支援した識字教室を終了した女性たちを政治参加に導いた、男女格差是正のための議席割当制である。IRMに行き、副市長が女性であることを知り「ここでもクオータ制が機能している！」と嬉しくなった。ウマ・クマリ・ラマ副市長は、女性の協働組合で長年活動してきた筋金入りのリーダーで、今期2期目というのはIRMでも初めてのケースだという。コロナや地滑りの時には陣頭指揮をとり、女性や障がいを持った人々の権利獲得のために改革を推進してきた。女性



IRM副首長ウマさん

議員の比率が146カ国中116位という日本とは大違いのネパール。農村部は、まだまだ貧しく、都市部との格差が大きい。特に、教育面では問題が山積している。高校を卒業しても仕事がないという悲しい現実がある。ウマさんの経験を活かし、人々の声に耳を傾けつつ、女性の活躍する社会を創ってほしいと期待する。

今回の訪問の目的の一つは、地域のリーダーたちと知り合い、良好な関係をつくることであった。面談の後、ウマさんから「今度ネパールに来る時はうちに泊まってね」と言われ、目的の一部は果たせたかな、と思った。

(ネパールチーム 乳井 京子)

新しい支援地セコン県での活動の手応えは

3月23日、地球の木は、支援しているJVC(日本国際ボランティアセンター)から岩田健一郎さんと後藤美紀さんを迎え、昨年度から始まったセコン県でのプロジェクトの活動状況を聞きました。

支援地の概要

ラマーム郡はセコン県の県庁所在地で比較的平地が多いが、タテン郡は高原地帯。どちらも少数民族が多数を占め、農業を生業とし自然の恵みに依拠した暮らしを営んでいる。しかし近年は企業による大規模プランテーションなどの開発事業や、農民による換金作物栽培に伴う負債によって、共有の森や土地を失うなどの問題を抱えている。



また、1村での行き過ぎた開発事業に関しても県や郡の行政へ提言を行った。これは、県境にある活動村がコミュニティー林候補地になっている森を企業が開発しようとしており、隣接する他県行政もそれに沿うようにしている事例で、JVCは関係する行政に対し改善を求める提言を行った。

2023年度の活動予定

引き続き、計画した活動を支援地の10村で進めるとともに、期間の延長も考えながら、次期プロジェクトの準備も並行してやっていく。

JVCラオス、セコン県プロジェクト

【期間】2022年4月～2024年3月(2年間)

【対象地域・対象者】セコン県ラマーム郡とタテン郡の10村(約600世帯、9,500人)

【目標】住民が暮らしの基盤である土地や森、川などの共有資源を持続的に管理・利用し、安定した暮らしを営めること

プロジェクトの4本柱

- ① 村人と村の基礎情報(人口、歴史、生産物、村境など)を収集し、共有資源のあり方の現状や変化、その管理と利用の仕組みについて確認し合い、共有資源の持つ価値について認識を共有できるようサポートする。
- ② 村人と共に、共有資源管理の仕組みづくりに取り組む(コミュニティー林や魚保護地区の導入など)。
- ③ 村が直面している開発問題について、その対処法を村人が身につけるための法律研修を行う。
- ④ 行き過ぎた開発事業に関して行政機関や事業者に対して提言活動を行う。

2022年度の活動報告

- ① 村で村人と共に村の基礎情報、直面している開発問題について情報を収集し、冊子や資料にまとめる作業を進めた。共有資源が食料や収入の源として価値を持っていること、またそれが減少しつつあることを確認した。
- ② 3村でコミュニティー林と魚保護地区を導入することで合意し、規則の策定サポート、区域測位などの作業を進め、2村で規則や地図などを示す看板を設置し、近隣の村人や行政官を交えた式典を実施した。
- ③ 法律研修に活用する2023年度版法律カレンダーについて、他のNGOや関係行政機関と共に内容を策定し発表会議を開催した。村が開発問題にしっかり向き合える力をつけるためにはどんな研修が効果的なのか、そのやり方や内容の検討を進めた。
- ④ 県や郡の行政に以下のような提言をした。

これまで行政によって魚保護地区が形式上設置されたが、村人から十分認識されずに失敗した例が複数回ある。これに対してJVCは、対象村の役員だけでなくその他の村人や近隣村など、様々なグループの意見や利害に配慮して活動を進めており、同じように活動を進めるべきでは、とアドバイスした。

サワンナケート県での活動を終えた時、村人から聞かれたのは「これ程毎週のように村に来て話し合いを重ね、村を歩き回ってGPSで地図を作ったり研修したりする団体は他にいない」という多くの声でした。村人に寄り添い村の自治力を引き出し、共に変化を起こす、そんな手応えでした。そういう草の根からの変化を、支援する村だけでなく他の地域にも広げたい。現地でも活動するJVCスタッフのそんな思いが、今回の報告でも伝わってきました。

セコン県でのプロジェクトは、収奪的な開発に対する共有資源の保全を第一に考え、共有資源管理に活動を1本化し、また提言活動にも力を入れていくとのこと。新しい村人と共に歩み始めた1年目。「行政の反応は協力的で、かなりやり易いと感じています」という岩田さん。明るい手応えでしょうか。



法律カレンダーを村人に配布

お知らせ

私たちは“森の民”と言われるラオスの人たちをずっと支援してきました。9月に開催する「地球の木講座」には哲学者の内山節(たかし)さんをお迎えして、広く森の話を伺います。詳細はチラシまたはホームページをご覧ください。(ラオスチーム 斎藤 和子)

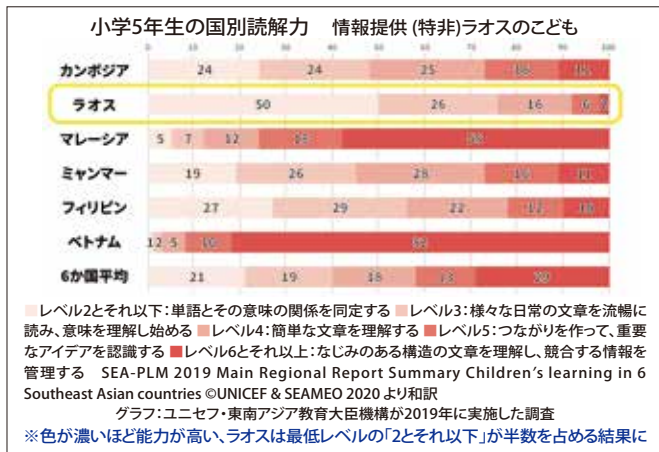
〈ラオス図書プログラム〉2023年度もよろしく

2022年度に引き続き、カウンターパートのNPO 法人ラオスのこども(以下 ALC)と共に、
図書を通じたラオスの子どもたちの教育環境向上のための活動を行います。

現地の活動:『リズムで学ぶラオス語』の改訂出版

2023年度は、ラオス語習得に役立つ本の出版支援を行います。ALCが、この本を選んだ理由を紹介します。

ラオスは、他の東南アジアの国々と比べても読み書き・計算などの「基礎学力」が低く(グラフ参照)、教室や図書室、教科書の不整備などの学校教育の整備の遅れがその要因となっています。また、ラオスでは少数民族(少数民族の多くは文字を持たない口承文化が伝統)が人口の40%以上を占めています。とりわけ、このようなラオス語が母語でない子ども達は、ラオス語を十分に習得出来ていない状態で、ラオス語で授業を受けねばならず、高い退学率にも繋がっています。子ども達が取り残されることのないよう学校での学びを継続し、知識や思考を深め、自分自身で物事を考え、人生を切り拓くためには、その基礎となる「ラオス語の習得」は必須の課題といえます。



今年度出版する『リズムで学ぶラオス語』は、「ラオス文学の父」といわれラオス語研究の第一人者であるマハー・シラー・ヴィラヴォンが編纂したかつての小学校の教科書を再編集・改訂したものです。イラスト付きで、分かりやすく学べるようになっており、ラオス語の特徴的な発音は、韻を踏んだ詩をリズムに合わせて朗読することで、自然とラオス語が身につくようになっていきます。

ラオスでは、音楽のリズムに合わせて詩、物語を唄う「スーン」という伝統文化がありますが、アクティビティでは、『リズムで学ぶラオス語』の中にある詩を「スーン」の形式で唄っていきます。先生やスタッフが太鼓を打ち鳴らしながら、詩の1節目「♪ある日 私は カワセミを見た(♪ムーマン コイヘン ノックテンシウ)」と唄うと、生徒たちはリズムを取り、手拍子をしながら「♪ある日 私は カワセミを見た」と繰り返します。このように掛け合いで復唱し、踊り、唱えるうちに、発音や単語が習得されます。音を



リズムで学ぶラオス語

中心にして学ぶこの方法は有効で、教えやすいと先生方にも好評です。その様子はYou Tube (<https://youtu.be/BKf32EATv3c>) でご覧いただけます。

国内の活動

2022年度に引き続き、日本の絵本を集めて、ラオス語翻訳を貼付し、ラオスの図書館に送る活動を行います。また、ラオス現地で図書館活動に長く関わる講師を招いた講演会も予定しています。

ラオス語翻訳貼付活動では、2023年度は「文字習得に役立つ絵本」の基準で、貼付ボランティアの方々と一緒に、6冊の絵本(福音館書店『しずくのぼうけん』『わたしとあそんで』『てぶくろ』『のろまなローラー』、こぐま社『11ぴきのねこ』、童心社『14ひきのひっこし』)を選定しました。

2022年度の報告

多くの皆様に心を寄せていただき、
ありがとうございました！

＜現地の活動＞

ALCによる教員向け図書館応用研修および環境絵本800部の再販を支援しました。

＜国内の活動＞

ラオス語翻訳貼付活動では、選定した5冊の絵本について130冊の寄贈を受け、ボランティア58名(のべ157名)の参加を得て、37回の貼付活動を実施しました。ボランティア参加者は高校生からシニアの方まで幅広く、大学や就労準備支援団体での出張貼付活動も行いました。



みんなで作った
ペープサート

左からアノンさん、ターンさん、
お二人を紹介くださった高階さん

貼付活動の際にはラオスの教育環境や図書環境を紹介しますが、それだけでなく、司書経験者から図書情報を得るなど、ボランティア参加者同士の学び合いも生まれています。また、3月末には5冊の選定絵本から『わたしのワンピース』を選び、貼付ボランティアの方々とペープサートをつくり、それを使ったラオス語での読み聞かせ動画を制作しました。ラオス語の音声の録音では、ラオスからの留学生(アノンさん、ターンさん)に参加していただき、ボランティアメンバーとの交流も行いました。

(ラオス図書チーム 相馬 淳子)



カンボジア女性緊急救援センター(CWCC)の支援について

2022年度をもって、カンボジア CWCC への支援を終了しました。

どのように始まり、地球の木はどのような支援ができたのかを、担当してきた2人に聞きました。

支援はこうして始まりました

2014年に新しいプログラムを選定するにあたり、当時地球の木の理事であり、カンボジアでフェアトレードの事業を行っていた古田麻里子さんに相談しました。その頃、カンボジアで社会問題となっていたDVやレイプ、人身売買などの被害女性たちの支援を考えていた古田さんは支援先の調査を行っていました。そして、長年この問題に取り組む「カンボジア女性緊急救援センター」Cambodian Women's Crisis Center (CWCC) が信頼できると確信し、地球の木の支援先の候補としました。

2014年4月、現地を訪問して聞き取り等を行った結果、「DVやレイプ、人身売買などというデリケートな問題ではあるけれど、女性会員が圧倒的に多い地球の木だからこそ、共感を持って取り組むべき問題であること」、「CWCCが単なる『シェルター支援』ではなく、包括的なサポートに加え、意欲的に予防、啓発にも取り組んでいること」、そして「地球の木のネットワークで支援者・協力者の派遣等を行いながら、自立支援について、現地と協働できる可能性があるということ」から支援を決定しました。この現地との協働は「自立支援」を旨とする地球の木にとって不可欠な部分です。プログラムのサブタイトルは「折れない心で立ち上がる女性たちを応援」としました。

「シェルター支援」は初めてのことで、心に傷を抱える入居者たちへの配慮は言うまでもなく、人物が特定できるような写真を撮ることや、建物の所在がわかるような記述は控えてほしいなど、CWCCのスタッフからいくつか注意を受けました。被害直後に保護



セラピーの一環としてのビーズ細工(2016年)



CWCC訪問(2014年)筒井さん(左から2番目)と古田さん(右端)とスタッフするセンターで一定期間過ごした人が、このシェルターに入居します。トラウマに苦しむ被害者が休むという真っ暗な部屋や医療室などもあり、深刻さがうかがえました。包括的なサポートとは、心身ともに傷ついた人たちに最大の配慮を行いながら、その傷を癒し、再び立ち上がる力を付け、社会へ送り出すというもので、彼女たちを「被害者」ではなく、「サバイバー」と呼んでいます。また、CWCCではDVやレイプ被害者が法的措置を行うのを前提としていますが、金持ちの加害者が金で解決しようとすることや、農村部では、出生届を出していない人も多く、国民IDカードがないため訴訟が難しく、またレイプ被害を証明するには医学的所見を必要とするが、病院でその証明を取ることに抵抗がある人が多いなど課題も多く、その難しさも知りました。

そんな中、料理、裁縫、手工芸品作りなどの職業トレーニングは、サバイバーたちの笑顔が見られる時間でした。彼女たちを応援し、自立の道を一緒に考えられたらと思いました。

問題が深刻な上に、制限が多い中、皆さまにどう伝えるか、頭を悩ませましたが、それでも訪問を重ねて関係作りを行い、地球の木のこともわかってもらえるよう努めました。3年目を迎えた2017年、自立支援を行った元サバイバーを訪ね、インタビューも実現しました。

(カンボジアチーム 筒井 由紀子)

現地訪問を重ねて

前任者から引継ぎ、サバイバーの女性たちに会ったのは、私がCWCCを初めて訪れた2017年6月の事でした。シェルターなので、住所は公開されておらず、看板もありません。高い塀に頑丈な門。緊張しましたがシェルター内はとても賑やかでした。サバイバーの女性や子どもたちは少し恥ずかしそうにしながらも、シェルター内の農園で育てている野菜を見せてくれたり、遊具と一緒に遊ぼうと誘ってくれたり、とても明るく迎え入れてくれました。

写真を撮ろうとスマホを手にとると「NO!」と言う女の子たちがいました。さすがに写真は嫌かなと思いました。その

女の子たちはお互いの髪型を直し、洋服のチェックを始めました。笑ってコミュニケーションを取りながらの楽しい時間。過酷な経験をしてきたサバイバーではあるけれど、その前にひとりの女の子なんだと、その時感じました。オシャレに興味があり、可愛く撮ってもらいたい、そんな彼女たちをととても可愛らしく感じた出来事でした。

シェルター訪問の後、社会復帰を果たした元サバイバーの十代の女性に会いました。漬物を作り市場で売る仕事をしていて、仕事の合間に学校にも再び通っていました。その後の現地訪問の際も、元サバイバーたちに会うことができ、シェルターを出て始めた新しい生活の楽しさ、苦労などを聞きました。地球の木からの支援金は決して大きな額ではありませでした

が、彼女たちの新しい生活や仕事を始める第一歩を支援できている事はとっても大きな喜びでした。

会報誌でお伝えすることには制限があるため、会員の皆さまにぜひ現地を訪れてほしいと思い、クラフト工房への訪問も含めたカンボジアスタディツアーを検討しました。CWCCからの快諾もあり、実現に向けて準備をしていましたが、コロナのため、計画が頓挫したことを今でもとても残念に思います。

私たちが明るく迎え入れてくれたこと、元サバイバーたちとの出会い、スタディツアーの計画。これらは時間と対話を重ねて、CWCCとの信頼関係を築いた成果だと感じています。



漬物をつくる少女(2017年)

2019年2月を最後にコロナで現地訪問が出来なくなりましたが、地球の木の支援金で2022年度もサバイバーへの医療・食糧支援また自立に向けた職業訓練などを行うことができた、と報告が届きました。コロナ禍でも支援を止めることなく、サバイバーたちに寄り添っているCWCCの活動はサバイバーやその家族にとっても大



元サバイバーの家庭訪問(2019年)右端が竹内さん

きな励み、支えになっていると思います。

地球の木としてのCWCCへのプログラムは終了となりますが、人身売買や性犯罪、DVがなくなったわけではありません。今後もCWCCの懸命な活動は続きますし、サバイバーたちの生活、人生も続きます。会員の皆さまに彼女たちのことを少しでも記憶していただけると嬉しいです。

長い間、年末募金なども含め、CWCCへ想いを寄せてくださり、本当にありがとうございました。感謝申し上げます。

(カンボジアチーム 竹内 千佳)



面白いことに 全力でチャレンジ

「地球の木と私」ということで思い返してみましたが、私が大学、今の仕事を選ぶきっかけになったのは地球の木があってこそだったと思います。海外でのインフラ開発や農業などに興味があり、高校生の頃は地球の木のワークショップなどに参加、大学ではスタディツアー(2017年)でネパールへも行かせていただきました。

そして私の現在の仕事は栽培方法もそうですが、作物の病気・虫の勉強もできる農業の仕事をしています。それも海外の農業分野での仕事がしたい一心ででした。ですので、今私が就職できているのは地球の木のおかげだと思っています。

今後の事ですが、コロナなどもあって海外で働くのかなどは見当つかない状況になってしまいました。しかし、大学を出てただサラリーマンで一生を終えるのはありきたりで面白味に欠けると私は考えています。ですので、高校・大学、地球の木を通じて培ったコミュニケーション能力と行動力で上記の人生じゃできないような面白いことを全力でチャレンジしてみようと模索しています。3月には美容院ホームページ掲載モデルの撮影、5月にはアーティストのミュージックビデオに出ます。

どの経験もいつか知識や自信、味になると思います。そして今年の目標は色々な業界へ人脈を広げる事です。何事も行動・チャレンジだと思いますので疲れない程度に頑張っていこうと思います。

(茨城県 五十嵐 大輝)

活動日誌(3月~5月抜粋)

3月

- 2月24日~3月4日 ネパール現地調査
- 10日 ラオス図書貼付ボランティア
- 11日 第1回臨時理事会
- 14日 ICT研修
- 20日 ラオス図書貼付ボランティア
- 21日 第9回定例理事会
- 24日 デポー展示会(東戸塚)
- 27日 JVCラオスプログラム活動報告
- 31日 ラオス図書貼付ボランティア

4月

- 6日 ICT研修
ラオス図書貼付ボランティア
- 8日 第10回定例理事会
- 27日 期末監査

5月

- 13日 第11回定例理事会
- 25日 ラオス図書貼付ボランティア
- 27日 第24回通常総会
ネパール現地報告会



トルコ・シリア地震緊急支援報告

(特非)パルシック 小栗 清香

2023年2月6日、トルコ南東部のシリア国境地域でマグニチュード7.8の地震が発生しました。パルシックは、発災翌日から寄付を呼びかけ、被災地の一つトルコのガジアンテップに職員を派遣し、緊急支援を開始しました。

■テントに避難するシリア難民の子ども

トルコにおける地震による死者は50,000人以上、負傷者は107,000人と甚大な被害を及ぼし、未だに数千人が行方不明となっています。壊滅状態になった被災地を離れるなど、地震によって移動を余儀なくされた人は300万人に上ります。発災から3か月経っても、Informal Settlementと呼ばれる、政府の支援が届かない非公式テント居住地で160万人が避難生活を続けています。被災地のトルコ南東部は、トルコに滞在するシリア難民のうち約50%の150万人を超えるシリア難民が暮らし、元々生活基盤が整っていない人が多い地域です。パルシックは、



テントに避難するシリア難民の子ども

2016年から2019年まで被災地域でシリア難民支援を行っていたため、その時に培ったネットワークを活かし、様々な事情から政府の支援を受けられない世帯を中心にこれまで活動を行ってきました。例えばシリア難民でIDカードを所持していないために支援を受けられない人に対して、被害が甚大で政府の支援が追いついていない地域などで、必要な生活物資を配付しました。ガジアンテップ市郊外にシリア難民世帯が、木材とブルーシートを使い自力で作ったテントに避難しているという話を聞き、マットレスや毛布を配付したところ「明日からマットレスで眠れる」と子どもが喜んでいて姿がとても印象的でした。ガジアンテップから車で4時間ほどのところにある最も被害の大きい地域の一つハタイ県では、女性グループから近くのマーケットに物資がないため、ガジアンテップで物資を調達して輸送して欲しいと支援要請を受け、下着、靴、オムツ、生理用品など必要な物を届けました。まだ多くの人が寝ている夜明け前の出来事だったため、着のまま避難し、服や靴のニーズが高いこと、洗濯機や手洗い用品も揃っていないため、洗濯が出来ず下着などは使い捨てていることが分かりました。

遠い日本からの支援に、トルコの被災者の方たちから「トルコと日本の長い歴史でお互い助け合ってきた関係もあるので、今回も日本が助けにきてくれてとても感謝しています。」という声を頂きました。

■シリアにおける被害と支援について

シリア北部を襲ったこの地震により、シリア国内では5,900人以上が亡くなり、被災者は880万人に上ります。トルコと大きく状況が違うのは、シリアは2011年に発生したシリア危機以降内戦状態にあるという点です。被災地のシリア北部は政府支配地域と反政府支配地域が接する境界地域にあたり、発生直後から、政府の支配が及ばない地域への支援の遅れが指摘されています。この地域では震災前から何百万人もの方が国内避難民となり、住民の大半が国連などの支援を受けながら暮らしていました。地震により35万人が避難を余儀なくされ、被災者は二重・三重の苦しみを抱えています。パルシックは提携団体を通じて、医療品の配付、ストーブやマットレス、衛生用品の配付を行いました。また、イスラム教徒にとって大切なイベントであるラマダン(断食)の時期に合わせて食料バスケットを配付しました。提携団体のスタッフからは、「この地震に対して、日本の皆さんが私達と一緒に立ち上がってくれたことを心より感謝しています。この地震はトルコとシリアで甚大な被害をもたらしました。特にトルコの被害の方が大きいですが、私が特に強調したいのは、トルコは多くの国から国際支援が入る一方、支援の難しさからシリアに対する支援は小さく、全てのニーズに応えることが出来ません。シリアでは多くの方が家を失い、この先が見通せません。引き続き皆さんに心を寄せて頂けると嬉しいです。」というメッセージを頂きました。



シリアでの食料バスケット配付の様子

皆様から頂いたご寄付で多くの人に支援を届けることができ本当にありがとうございました。まだまだ復興には長い時間がかかりますが、被災者たちの当たり前の生活が一日でも早く戻るように、パルシックは復興に向けて出来る支援を続けていきたいと思っています。引き続き被災地の人びとに心を寄せて頂けると嬉しいです。どうぞよろしくお願いします。

地球の木ではパルシックを通じて、5月までトルコ・シリア大地震の緊急支援募金を行い、合計895,000円のご寄付をいただきました。
ご協力いただき、ありがとうございました。



◆少子化と高齢化による労働人口の不足が目に見えているのに、移民政策に取り組みない政府。来日したばかりで、小学校に子どもを編入させた中国人のお母さんが言う。「クラスの3分の1は中国人。日本語わからない子のサポート、日本語できる中国の生徒がする」と。
(K.N)



特定非営利活動法人
地球の木